

幼児のコミュニケーション

―保育の現場から考える(1)―

田中三保子

昨年度、三年ぶりに三歳児クラスの担任になりました。入園式のあと十日ほどは、とても静かでした。母親から離れられなくて大泣きする子も、もめごとを起こす子もいませんでした。一人ひとりがその子なりに遊び出し、片づけも積極的にしてくれて、ほとんどなにごともなく一日が終わっていきました。それぞれが自分の好きなものに黙々と取り組

み、遊具の取り合いになりそうになると、「いいよ」と一方が譲ることさえあります。それがあまりにも自然で、我慢をしているようにもみえないのです。全体にひっそりと、声もなく遊んでいる様子からすると、どの子も、初めての環境でそれなりに緊張しているのは分かります。緊張のゆえに今は抑制がきいていて、ぶつからないでいるだけなのでしょうか。

今までの私の体験からは考えられない光景でした。

A夫と子どもたち

入園式の日、A夫は母親にくつついてめそめそしていました。翌日からは、母親が見える範囲にいれば、汽車やブロックなどに手を伸ばして遊ぶことができ、少しずつ行動範囲が広がっていきました。十日目、「本人が玄関でいいと言ってますから」と母親は保育室から出ていきました。A夫はそれまでと変わらない様子で遊び続けています。よかつたと思ったのもつかの間、A夫は積み木を蹴とばしたり、ブロックを投げたりし始めました。遊んでいる子どもを後から押し倒したりもします。それまでの気弱な様子とは違って、消化しきれない何かを吐き出しているように見えました。それから毎日、A夫は突然誰かをたたいたりして、彼が室内にいるときは、私は心配で外へ出られなくなりました。周りの

子どもたちはといえば、たたかれたり邪魔されたりしても、目に涙を一杯ためている程度なのです。よほどでなければ大声を出さないのです、私もすぐには気がつかないこともありました。

A夫の行為を止め、相手がいやがっていることを彼に伝え、相手を慰めたりしながら、私は、もしかしたらこの子どもたちは自分を表現する方法を知らないのではないか、それ以前に、自分が何を表現したいのかも分かっているのではないかと思うようになりました。初めの頃、A夫のほかには、相手の領分にずんずん押し入っていく子どもがいけないこともあったのですが、ものをとられても遊びに侵入されても、相手を見ているだけで、しばらくするとまた元の遊びを続ける子どもが多いように感じました。いやな目にあつたときに子どもはよく泣きます。泣くことは、相手に対するいやとかやめてほしいというひとつの、それも原初的な感情表現、意思

表示のしかたではないかと思うのですが、それもしないのです。自分を抑え他人に合わせることを自身に強いてきたために、本当は泣きたいのに泣けないでいるのかしらと考えるもみたのですが、それにしてはどんどんとよく遊びます。この世に生を受けてたかだか三年ちよつとの人たちです。まだ状況を讀みとれなくてあたりまえです。緊張が解けて状況も分かってくれば、少しずつ自分を表現できるようになってくるのではないかしらとも思ったのですが、やはり少し違うような気がします。初めての体験に戸惑っているのは分かります。でも、自分が相手に何を伝えたいのか、それを伝える適当なすべは何か分からなくて何もできないでいるのではないかと、私には感じられたのです。

B子とC夫

五月の連休明けのある日、私は保育室から山（園

庭の隅の小高いところ）へ行こうとしていました。何度も誘われていて、やっと行かれるようになったのです。前方でC夫とB子がやりとりしているのが見えます。B子はこちらに背を向けていて表情が分からないのですが、どうも様子が変です。私が行くと、B子の顔は引きつっていて、C夫は困ったような顔になりました。C夫は少し前からB子に関心があつて、手をつないだりかまったりしていました。きょうは、どうやらだんご虫取りにB子を伴いたかつたようです。B子は手を引っぱられて、身体で抵抗して行きたくないことの意味表示をしていたらしいのですが、それはC夫には伝わっていないようでした。「Bちゃんは、いやつて言ってるみたいよ」。私はB子の気持ちをC夫に何度も伝えます。B子が不安そうなので一緒に保育室に戻りましたが、B子は身体をかたくして動けなくなっていました。自分の意志に反することを無理矢理させら

れたことが、かなりのショックだったようです。C夫の方は、B子と楽しいことを一緒にやりたかっただけ、いけないことをしたわけではないと思つていよう、そのあとも、何度もB子を誘いに来ました。B子の気持ちを伝えても分かつてもらえなくて、誘われるたびに、B子の顔が引きつっていきました。

B子は、C夫だけでなく他の男の子にも年長児にも人気があつて、遊びに誘われたりかまわれたりすることが時々ありました。B子がそれをどう受けとつていいのか私は気になっていました。時折B子の表情をうかがうのですが、応か否かが読みとれませんでした。おそらく、もっと前からいやだと思つていたのでしよう。どんな形であれ、B子がいやという気持ちをもう少し表現できていれば、こんなに怖い思いをさせないですんだのにと、私はB子のこわばった身体を抱えながら思いました。

C夫は、B子がいやがつて手を後ろに回しているのに、何も言わずに、その手を取ろうとしていました。一緒に行こうとか、山に行こうとか何か誘いかけることばがあれば、B子も首を振るなりいやと言ふなり、もう少し明確な意思表示ができたのではないでしようか。

人とかかわつていくには、自分の気持ちや考えを相手に伝えていくことがまずは必要です。それには伝えたいことが表現できなければなりません。表現の最も分かりやすい形がことばによるものだと思ひ



ます。今までの生活環境の中では、ことさらにことばで表現しなくても、できなくても、親しい人同士お互いに分かり合えていたのかもしれない。でも、これからは、新しい環境の中で知らないもの同士親しみ合っていくために、それぞれが自分を表現し伝え合う方法、できればより効果的な方法を身につけていってほしいのです。保育者としてそのための努力をしていきたいと、このとき私は思いました。

「はけない、はかせて」

D子は入園早々から臆することなくどこにでも行って遊んでいました。面白そうなことを見つけると、年長児の中にも黙って入り込みます。思うようにならないといきりたつて、相手が誰でもひるみません。「せんせー、この子がね、勝手にしちゃうの」と年長児が私に訴えたりします。ほしいものが

あると、他人のものでも持つていってしまいます。きけば、「だって、ほしかつたんだもん」とあつけらかんと答えます。悪びれるようすはありません。園庭に出ようとして、側に私がいると、自分で靴を履き替えようとしません。「はけない、はかせて」、立ったまま言い放ちます。ひとりの時は自分で履いているのですから、履けないわけではありません。

ほしいものやりたいことは、即、実力で手にします。「はけない」と言えば、他人は履かせてくれると思つていようです。素直といえども素直です。まわりがD子の意をくんでくれて、摩擦も起こらなかったのでしょうか。D子は、こうすれば自分の思いが実現するという体験を重ねて、D子なりの自己表現手段を身につけてきたのだと思います。

山でD子が仁王立ちしているのに行き会いました。側で年長児がごさを広げています。「Dちゃん、もしかしたらここに入れてもらいたいの」、私が尋

ねると、D子は頷きます。「きいてみた」。D子は首を振ります。「Dちゃんが入りたみたいなんですか、入っていい」。年長児は困ったように顔を見合わせています。D子には入ってほしくないけれど、言えないでいるようです。「きょうはお姉さんたちだけで遊びたいみたい。また今度にしてもらっていいかな」、私はD子にそう伝え、「また今度遊んでくれる」と年長児にきいてみました。「うん」という答えが返って、「また今度遊んでくれるって。いいかしら」と私が確かめようとするまもなく、D子は走り去ってしまいました。

D子は入りたから入るを繰り返して、それだけでは必ずしも思いは通らないと分かってきたようです。でも、どうしたらよいかはまだ分かっていません。D子の思いをくみとってことばで表現してみたり、具体的なやりとりを示してみたりすることで、自己表現のしかた、コミュニケーションのしかたを

学びとってほしいと、このとき私は思ったのです。

さまざまな自己表現

誰かに何かを伝えようとします。その伝え方が率直であれば、真意は伝わりやすくなります。応にしも否にしても、相手は応えを返しやすくなります。そして、相手とのやりとりが成立します。D子の場合には、その意図がとて分かりやすかったといえます。ちよつと怖いので、年長児でも返事に詰まってしまったのです。そうでなければ、子ども同士でやりとりできていたでしょう。D子なりに、年長児の反応からコミュニケーションのしかたを学ぶことができたと思います。

表現のしかたが率直でない場合、相手は真意をつかむことが難しくなります。例えば、すねる、いじけるなども自己表現の手段と考えることができず。素直に思いを伝えることが何らかの理由ででき

なくなつて（素直に表現しても受けとめてもらえなくて）、すねたり、いじけたりして自分を表現しているのです。素直な気持ちの表明がそのまま相手に伝わっていけば、そんなまわりくどい表現をする必要はありません。すねたりしても、相手に分かってもらえるとはかぎらないのですから。

A夫の場合に、遊具を蹴とばしたり誰かをたたいたりするのも、彼なりに伝えたい思いがあつてのことだったのでしよう。思うようにならなくて鬱屈した気持ちを、例えばたたくなどの形で表出していたのだと思います。彼は相手に噛みついたこともありました。子どもが悔しかったり腹が立つたりしたとき、思わず相手をたたいてしまうことは、方法はともかく納得できないことではありません。けれども噛みつく、つねる、髪の毛をひっぱるなどの行為は、子どもの中から自然に湧きおこつたものとは言えないような気がします。自分がやられたり、誰か



がやっているのを目にしたりして、自分を表現する手段として学びとつたものと言えましょう。A夫もよほど悔しかったのかもしれませんが。

四人のその後

初めのうちおとなしなかつた周りの子どもたちも、A夫にたたかれたり、せっかく作つたものを壊されたりすると、たたき返すようになりました。そういうとき、A夫はほんの少しの痛みでも泣き崩れてしまいます。相手の思いを伝え慰めても赤子のように泣き続けます。抱いたり、その手を引いたりしてA夫の気持ちたちが落ち着くのを待ちながら、私にもよく

分からないA夫の思いが、早く表現できるようになるといいのにと私は思っていました。結局、A夫が自分のことばで自分を表現できるようになるまでには十ヶ月かかりました。

三学期になると、A夫は表情が穏やかになって、力を使って思いを表現することはほとんどなくなりました。こんどはE夫が登園時に泣くようになりしました。あとで分かったのですが、一学期にA夫に理不尽にたたかれたことを、そのころになって強くいやと感ずるようになったらしいのです（E夫はたたかれても何もいえない子でした）。めそめそして私から離れられなくなってしまうと、急いで行かなければならないようなとき、E夫の靴の履き替えを待つていられなくて、私が飛び出してしまうと、決まってA夫が私の所にやってきました。「Eちゃんが泣いてるよ。せんせいがいないって」と、E夫の手を引いて連れきてくれたり、知らせに来てくれたり

しました。A夫の穏やかな様子に、このときはE夫はいやがりませんでした。A夫はいつの間にか自分のことばで自分を表現できるようになって、相手にもそれがきちんと伝わるようになったのです。力での思いを伝える必要がなくなったのでしよう。

B子は大きな瞳でじつと周りの様子を見ていることがよくありました。一緒に遊びたいと親しみを示しながら寄っていく子があつても、知らん顔をしたり、時には相手をたたいたりして、私を驚かせることがありました。自分のペースで自分の世界を広げていきたかったのでしょうか、それを相手に伝えられなかったのだと思います。二学期になると人が変わったように積極的になりました。いろいろなことに自分からかわり、大きな声でしゃべるようになりました。でも、三学期にはまた、寡黙で周りをじつと見ているB子に戻ってしまいました。クラスの子どもたち一人ひとりがよく見えるようになって

て、却って何も言えなくなってしまうたようでした。私に気持ちをおくんで相手に伝えたり、相手との間を調整することが増えました。B子が自分を普通に表現できるようになるのは、四歳児クラスになってからです。

C夫はA夫とともに過ごす時間が増え、C夫自身もたまたま壊したりする時を経て、自分で自分の世界を作る楽しさを味わい、自分のことばで自分を表現できるようになっていきました（この間の経緯については別の視点から『幼児の教育』第九十八巻第一号にまとめてみました）。

D子は相変わらず自分を率直に表現し続けていました。ただ、相手の思いや状況をきちんと伝えると、少し考えてから、納得して自分を抑制してくれることは増えていました。

三学期も終わりに近い日のことです。F夫が「Dちゃんと遊びたい」と何度も言ってきました。自分

ではなかなか言えないようです。D子は長いスカートをはきリボンのついた棒を持って、数人の女の子とバレエを踊っていました。かなり前からD子が熱中している遊びです。私は踊りの合間にD子に声をかけました。「Fちゃんが遊びたいって言うてるわ」。D子はちよつと首を傾げてから答えました。

「Fくんの気持ちはわかるけどね」。そしてリボンをひらひらさせながらF夫に向かって走っていきました。「あなたの気持ちはわかるけどね」。D子の声が聞こえてきましたがそのあとは分かりませんでした。おべんとうのあと、二人が楽しそうにお山で遊んでいるのを見かけましたから、交渉は成立したのでしょう。D子は自分をてらいなく表出し相手とぶつかる過程を通して、相手にも通じるコミュニケーションのしかたを身につけていったのだと思います。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）